

# 先進都市木造建築に挑戦

## 木場に蘇る木造社屋

### 都内でも数少ない技適適合建築物

年初から建築を進めていた日刊木材新聞本社社屋（東京都江東区冬木23-4）が9月30日に竣工し、今月19日から業務を開始した。当地は準防火地域のため木造建築物にも建築制限が課せられるが、木材を現して使うことを可能とする木造3階建て準延焼防止技術適合基準（技適）建築物とすることで、準耐火建築物と同等の扱いを受ける先進的な木造都市建築物が実現した。床面積が400平方メートルを下回り、必ずしも大型木構造建築物とはいえないが、構造と意匠が一体化した建築物を目指そうという施工主と設計、さらには建築会社の意識が一体化したものと見える。「街に森を」「都市に地球温暖化ガスを固定」といった木材利用の領域を広げ、環境配慮型都市木造・木質化建築を進める一助を目指した。

#### 構造・意匠の一体化構想

発刊して75年を迎える。同 屋建設を計画した。構造は所にあつた旧社屋が築30年 木造3階建て、意匠は、木を透過し、手狭になったこの街にふさわしい木質感を基本コンセプトとして、創刊75年を機に社

アトとした。

当地はかつて木材業者が数多く営む木材団地が形成された地域だが、新木場への移転で面影が薄れ、道行く人たちも往時をしのぶことができないほど景観が変わってきた。

1951年から同所で木材関連の報道事業を営んできたものとして、木材の街の「ランドマーク」を意識した建物を目指した。

もはやこの町が木材産業の町として再現されることはないとしても、木材を主体とした新たな建築物が建設されることで、「木場・深川・仲町」という木材の町の名にふさわしい景観を新たに生み出したいという願いがある。

また、社屋に隣接して江東区立深川第二中学校がある。登下校時に生徒が社屋をのぞき込んで、木材、森林、林業にかかわる疑問や関心があればいつでも相談に乗れるよう、正面玄関を開放的にして、木に親しんでもらえるよう設計に工夫を凝らした。

さらに、政府が目指す木構造建築物を後押しするものとして2019年度の法改正で従前から告示により指定されていた技術適合建築物が準延焼防止建築物と定義されたことで、設計にそれぞれのルールを取り込みながら都市圏における木造建築が可能となった。

三角桁格子を通した明かりがきれい



木造・木質化とはすなわち、構造と意匠が木質感あふれるものであると解釈しながらも、木材を適材適所に利用することで、木造建築物によく見られる個性がきつすぎる木材の工を極力排することとした。

このため、木質素材で建物を覆い囲むことを避け、開口部を可能な限り広げ、それでいて室内の空調や遮熱、遮光に配慮し、働く人たちに快適な執務空間を提供することを心掛けた。

木構造躯体は、福島産力ラ松構造用集成材によるGIR接合で無柱空間を作った。3階部の4本の屋根大梁からCLTを利用した3階床（2階天井）をつり下げることにした。編集室の2階天井部は無節の愛媛県産松CLTを採用し、検特有の香りと明るさを演出することができた。

社屋正面が通りに面し、しかも西向きなため、午後から西日が強く執務室内に差し込むことを極力避けるため、コンピュータによる三角桁格子をガラスファ

面から見ると、昔の町思い起こさせる木組格架のイメージを意識し、南側の隣接建築物と基準に従い防火構造要件したが、正面から3分は1階部を望める開放側面と木質感を際立たせた。

外壁には道産タモを付け、玄関はシナ合板材として木の葉模様をCデジタル加工した。れとなると室内からのりが木の葉模様を浮かせている。

躯体及び構造材サブーム（合板ほか）で木総使用量は92・3355立方メートル、1平方メートルあたり25887立方メートル。

#### ◇社屋データ◇

- ▽建物地上3階建て。延面積375.82平方メートル、延床面積135.48平方メートル、最高9.97メートル、最高軒高9.47メートル
- ▽設計㈱IKIDS
- ▽設備㈱Z〇設計室
- ▽構造㈱KAP
- ▽施工㈱長谷
- ▽木造躯体工事SMB建
- ▽総合プロデュース小泉

完成になった日刊木材新聞社新社屋

